

288 中央大学記事（中央大学創立第二十五年記念式）

〔『法学新報』第21卷5（242）号 明治44年5月1日〕

○中央大学記事

○中央大学創立第二十五年記念式 中央大学は去る四十三年十一月十一日創立第二十五年に相当するを以て当日其記念式を挙行する筈なりしか記念校舎工事の都合に依りて延期となり居りたることは既に屢々、報道したる所なり而して該記念式は去月三日午後一時より新築の大講堂に於て挙行せられたり定刻来賓並に学生一同の著席するや学長法学博士菊池武夫氏は登壇して左の開会の辞を述ふ

物事の創め当日は皆さん如何でありますか私などには甚だ記憶し悪いものであります、併し同じ数が重なりますと例へば一月の一日とか、三月の三日であるとか云ふやなことになりますと余程記憶に便利である、此学校の記念日は偶々矢張数の重なる日に當つて居ります、十一月の十一日であります、夫れ故私などは余程覚へ易いやうに思つて居ります、此十一月の十一日は例年記念会を催すのでありますが、昨年は丁度二十五年目に当りますので特に記念式を行なはふと云ふことに致しました、所が御承知の通り昨年は殊の外雨降りでありましてそれが為めに建築の方が意外に長引きまして、それで其当時に式を挙げると云ふことは出来ぬやうになり、遂に今日に至つて此式を挙げると云ふやうになつた訳であります、是れは後刻記念式委員長より委細の御報告もあるであらうと思ひますが、左様な訳で今日は記念日ではありません、已むを得ぬ事情に依りまして延びた訳であります、創立の當時から今日に至ります間に於きまして法律学の風も大分變遷を致したやうに心得ます、記念日と申せば自ら過去を追懐す

ることになります、其變遷の概略を茲に申述べやうかと思ひます

此学校を立てます頃は仏蘭西法が流行致した時代でありまして、仏蘭西法ならでは法学界に顧るべきものがないと見へる勢でありました、少なくとも法律の実務に当ります裁判所及代言人の社会に於ては左様な傾であつたかと記憶致して居ります、仏蘭西の法学固より結構であります、併し吾々の目に映じた所に依りますと或は純理に偏したり殊に依ると空論に走ると云ふやうな傾があるやうに思はれた、英米の法律学の方は之に反しまして法律は体裁に於て甚だ調ひませぬ、又議論も寧ろ汚穢しい、併ながら実用向を主眼として居るのでありますから、恰も此仏蘭西法学の方の短所を補ひ其弊と吾々が認むる所を矯むるに効能がありはしないかと云ふ所から致して此学校を興す氣になりました、勿論そののみが吾々の学校を興した目的じやありませんが、其目的の一つでありました、それから憲法の發布せられました頃から追追仏蘭西法学は衰へ、さうして独逸法学が盛になりました、其独逸法学の風を見ますればそれは理論に偏するとか實際を離ると云ふ方に於きましては仏蘭西法学より一層甚だしいやうに私などは覚へるのであります、仏蘭西法学の理論は兎に角法律上の理論でありました、所が独逸法学の方は法律の理論に加ふるに多量の哲理を以てするやうに思はるのであります、英米の流儀でありますと学者の説は如何に合ふて居りましても、何程面白くても一家言である、裁判所が採用致しま

せぬ限りは私見私論に過ぎないのであります、法律を解釈する正当の権限を有つて居る人は裁判官に外ならない、故に法律の如何を知るのには裁判例を研究するより仕方がない、それで法律上の議論も判決例の範囲を出でないと云ふ工合であるのであります、之に反して独逸学风に依りますと学説が非常に重んぜられて裁判例などと云ふものはホンの参考にせらるると云ふ趣きに見へるのであります、是は私が斯う見る所は違つて居るかも知れませぬが左様に思はるのであります、それでありますから、仏蘭西法全盛の時代を顧みますれば古歌に所謂「うしと見し世ぞ今は恋しき」と云ふ感に堪へないやうな心持があるのであります、次に私共などが法律を研究致しました時分には独り英米国法を学んだのみならずそれを学ぶに英語を以てしたのである、それで英語では知つて居ても我国語で何と云ふものかを知らずに卒業したと云ふやうな工合であつて此学校を創立致しまする即ち明治十八年当りは無論そんなことはありませぬ、皆日本語を以て教へたに相違ない、けれども参考書と云ふものは殆どないと云つて宜かつたので増島博士が裁判<sup>釋</sup>萃誌と云ふ雑誌を出しますまでは判決例さへ容易く見ることが出来なかつたと云ふ有様であります、そこで已むを得ず外国の書物を参考しなければならぬ、此学校に於きましても原書科と申すものを置きました英米の法律書其物に就て研究することにしたこともありそれから其後も参考として英米の法律を教へると云ふやうな訳、独り此学校のみならず帝国大学に於ても今日矢張英米法、独逸

法と云ふやうに参考科が置いてあるやうであります、併し其後段段と著書も殖へて参りまして今日備はつたと云ふことは出来なくても大分に学生の参考として出来た書物は殖へて参りました、判決例などを載せる雑誌、判決録などと云ふやうなものも大分にありまして即ち参考すべき書物は一通りある世の中になりました、自分の国の法律を学びまするに外国語を修めさうして其言葉に依つて外国の法律を参考すると云ふことは余程不便利なことで年月を要することであります、学者となつた人或はならんとする人が左様な途を履むのはそれは宜いのであります、一般の学校教育の中に左様なことをすることは甚だ学生に取つては不便なことで考へるのであります、他国は広く知りませぬが、大抵の国は自分の国語で自分の国法を研究してそれを以て学校教育は十分だとしてあるのであらうと思ふ、それで将来はどう云ふことに成行くものであらうかと申せば自分の考では外国書を参考すると云ふことは次第に廃るだらうと思ふ、即ち日本語だけで日本の書物を参考してそれで学校教育は足りるものとなる世の中になるであらうと思ふ、二十五年は学校の歴史としては長い訳じやありません、けれども吾吾の一生に取つては一段落であるとするのであります、で此間に唯今申すやうな極く大略を申しても余程の変遷があつたのでありますから其機を矢張一段落と致して記念式を催すのは強ち無益ではあるまいと思ふ、少なくとも左様な訳で此記念式を今日挙げます訳でありまして、其機に於きまして聊か所見を申述べることが得ました

のは私の光栄とする所であります（拍手喝采）

右了るや記念式委員長元田肇氏は立て左の報告を為したり

閣下並に諸君本日我中央大学第二十五年の記念式を挙行するに当りまして、不肖茲に委員長として御報告を致しますことは私の最も光栄とする所でございます、本大学は明治十八年に創立致しまして以来年を閲すること二十有五、學員総数五千四百二十八人、現在學生総数二千百十七人、現在の分科は法律科、経済科、商科、専門科及予科等でございます、外国語研究科及高等予備校の二校を附属致してございます、本校學員の地位職業を挙げますれば高等文官、文武官二百二十三人、司法官三百七十二人其他の官公吏千八百九十九人、弁護士三百七十六人、銀行会社員其他実業家千七十三人、新聞記者一百二人、貴衆両院議員二十八人、府県會議員、道會議員合せて七十五人に大別することが出来るのであります、明治四十二年十二月に本大学學員会に於きまして記念式を行ひ記念事業を挙げんことを決議致し昨春來東京學員会及支部に委員を設け其担当を定めまして、記念事業として在來の校舎階上に一百坪の大講堂即ち此室であります、外に七室合せまして三百八十坪の増築を致し且創立以來二十有五年間教授の任に當られ尚ほ理事として今日尽瘁せられて居られます所の奥田博士記念文庫の開設を企てまして會計通信等は各其常任委員を設け其事業を進めまして昨年十一月略建築の功を竣り茲に新築講堂に於て記念式を挙行することを得るに至つた次第であります、本大学の成績及記念式を挙げるに至りました概要

は唯今申述べた通りであります、本大学學員諸氏が母校を愛するの情に至つては極めて熱烈でありまして特に記すべきものがあると思ひますから一言致します

明治三十八年創立二十年に當りまして、學員諸氏は相議して記念講堂を建てました即ち此前に連つて居る講堂がそれであり、明治三十八年の如きも斯の如きことがありました即ち学校出身の學員諸氏が相謀り記念式に際し講堂を建築して母校に寄附すると云ふことは絶無の例ではございませぬが、本邦學界に於きまして甚だ其例を多く見ない所であると思ひます、誠に本校の誇りとするに足る美風であると私は信じます、而して今又二十五年記念式を挙行するに當りまして更に母校の爲めに講堂を増築致しました、是より御案内がございませぬが、此講堂を始めとし此二階の全部が即ちそれであり、尚ほ奥田博士の爲めに記念文庫を創立致すことにしまして本日の祝典を挙げるに至つた次第であります、斯の如きは常に本大学の光栄と云ふに止まらぬと私は思ひます、斯道の發達を助け世道人心を裨益する点は実に多大なものであると云ふことを私は断言することを憚らぬのであります、斯様な次第でありますから学長、理事並に不肖等益感奮致しまして此創立二十五年に當りまして義捐金を醸集致し本大学の基礎を鞏固にし之を永遠に維持せんことを期して居る次第であります、而して斯の如くにして學員諸氏の厚意に報ゆることが出来るだらうと思ひます、終りに臨みまして尚ほ私は一言致したいことがございませぬ（哭）

かの維持員、今日に於きましても多数ではありませぬ、維持員数名の発起に始まりまして爾来二十五年を経過致して居ることでありますが、此間殆ど独力を以て今日の大を致し唯今述べました如き好成績を挙ぐるに至りましたことは学長、理事其下に幹事もありまして孜孜として校務に尽瘁せられ亦教授諸君が親切なる指導訓育の結果に依つて茲に至つたことであると云ふことは是れ亦疑を容れぬことでありまして私は茲に深く当局者並に教授諸君の功勞を感謝しなければならぬと思ふのであります、謹んで経過の一端を叙しまして來賓諸君に供します次第であります（拍手喝采）

次で法学博士岡村輝彦氏は中央大学講師を代表して左の祝辞を朗読せられ

本日我中央大学創立第二十五年記念式ヲ挙行スルニ当リテ本大学講師ヲ代表シテ祝賀ヲ表スルハ予ノ光榮トスルトコロナリ

本大学創立以来年処末タ必スシモ多カラスト雖モ其国家及ヒ社会ニ貢献スルトコロ甚タ多キハ天下俱ニ瞻ル所ノ事実ニシテ是レ主トシテ講師、學員相共ニ其力ヲ合セテ学風ヲ興シ志尚ヲ高ムルニ努メタルニ由ル而シテ学風志尚ハ其歴史ヲ成スニ依リテ益々顯ハル我中央大学二十五年ノ成績ハ則チ今日ニ於テ之ヲ見ルヲ得タリ其五十年百年ノ後ニ於ケル功業ハ之ヲ今後ノ講師、學員ノ共同尽力ニ待タサルヘカラス而シテ本大学百年ノ歴史ヲ作ラント欲スル上ヨリ云ハハ今日ハ則チ僅ニ其四分ノ一ヲ過越シタリトイフニ止リテ悠悠二十五星霜ヲ閱

シテ今猶ホ肇造ノ間ニ在リ願ハクハ是ヨリ諸君ト共ニ相努力磨励センカ此ニ記念式ヲ挙クルニ際シテ學員諸君ヨリ本大学ニ記念建物ヲ寄附セラルルノ盛事アリ予ハ其天下希ニ觀ルノ美拳タルヲ頌揚スルト同時ニ微力自ラ規スル所以モノヲ述ヘ以テ祝辞ト為ス

明治四十四年四月三日

法学博士 岡村輝彦

次で學員坂崎儒氏は學員会を代表して左の祝辞を朗読し

我中央大学ハ本日ヲ日ヲトシ茲ニ創立二十五年記念ノ盛典ヲ挙行セラル回顧スルニ本学ハ明治十八年ノ創立ニ係リ爾來今日ニ至ルマテ二十有五年ノ春秋ヲ閱シ學員五千余名ニ達ス由來本学出身者ハ空理ヲ排シテ実行ヲ尚ヒ虚榮ヲ斥ケテ著実ヲ好ミ其官ニ在ルト野ニ在ルトヲ問ハス国家ノ進運ニ貢獻シ各其天分ニ応シテ利用厚生ノ術ヲ翼ク而シテ夫ノ国情民俗ニ悖戻セル旧民法ノ実施セラレントスルヤ蹶然起テ其延期運動ノ中心トナリ遂ニ其目的ヲ達シタル如キハ蓋シ本学ノ歴史ニ録スヘキ一事蹟ナラストセンヤ

本学今ヤ出身者諸氏ノ出資ニ由ル増築校舍成リ奥田文庫亦將ニ設ケラレントス吾人本学ノ學員タル者誰カ懽喜セサランヤ然リト雖モ吾人ハ決シテ小成ニ甘ンスル者ニアラス必スヤ刻苦瘁励益本学ノ發展ヲ將來二期セサルヘカラサルナリ茲ニ本学學員一同ヲ代表シテ聊蕪辞ヲ陳ヘ以テ祝辞ト為ス

明治四十四年四月三日

中央大学學員会総代 坂崎儒

次で學員法学博士花井卓蔵氏は左記の如ク記念建築講堂寄附の式辞及奥田文庫建設計画の報告を為し

閣下並諸君の前に於て、我中央大学創立二十五年記念式を挙ぐるに当り本大学出身学員の総てを代表致しまして、記念校堂を寄附するの任務を授けられたるは私の最も面目と致す所でございます、今より二年前即ち明治四十二年十二月我学員は二十五年記念式に際し、其記念たるべき事業を起すべきことを議決致したのでございます、爾來東京学員会本部は之を各地の支部に囿り委員を設けて計画を擬し学員諸君の寄附を求めたるに約五万円を得たのでございます、於是、校堂の増築を企つることに相成りました、而して又創立以來二十五年の久しきに亘り教務並に経営の衝に当られ最も尽瘁せられたる奥田理事の功績を表彰する為めに記念文庫を設置することを企てたのでございます、乃ち元田君を記念式委員長に挙げ岡村博士を建築委員長に仰ぎ我我は其指導の下に事に當り、今日工事の竣功を告ぐると共に、閣下諸君の前に謹んで之を捧げて母校に献じ以て恩義の万一に酬ゆる次第でございます、我我学員が記念式に際して、師恩の厚きを謝するの誠意であります、我我学員は母校の薰陶誘掖の賜によりまして社会に働くことが出来たのであります、今日其学問上の恩義を母校に対して報ゆるは弟子当然の本分なりと信じます、茲に謹んで本大学代表者たる菊池学長並に奥田理事に向つて閣下諸君の前に謹んで捧呈の辞を述べます（拍手喝采）

奥田文庫建設のことは今尚ほ経営中に屬し著著進行を致して居りまするが、其詳かなることに至りましては工成るの後に於きまして更に諸君の前に御報告を致すの機会を得むことを

欲して居ります、我中央大学と奥田博士との関係は御承知の通り教育の点に於きましても、経営の点に於きましても、少なからざる恩義を吾吾は忝なく致して居る次第であります、明治十八年七月創立以來今日に至るまで、或は教授に或は経営に御多忙の身なるにも拘らず力を専らにせられしことは御承知の如くであります、今日の隆運を見るに至りましたるも畢竟其余恵であります、依て我我学員は一同相謀り奥田博士の為めに記念文庫を設立して母校の恩義を記すると同時に理事者経営の恩義をも謝さなければならぬと存じまして、此企てを致した次第でございます、茲に謹んで閣下諸君の面前に於きまして奥田理事に向つて、記念文庫創設の辞を呈します（拍手喝采）

了て学員中山佐市氏は左記記念品贈呈の式辞を朗読し

前校長法学博士増島六一郎君、学長法学博士菊池武夫君、理事法学博士奥田義人君、理事法学士伊藤悌治君及記念会委員長法学士元田肇君各閣下、幹事佐藤正之君、事務員窪田欽太郎君ノ各位カ多年校務ニ執掌セラレ経営其宜ヲ得本日創立第二十五年記念式ヲ挙クルノ盛事ヲ觀ルニ至リタルハ我学員会ノ常ニ感佩措ク能ハサル所ナリ爰ニ感品各一個ヲ贈呈シテ恭シク記念ノ微意ヲ表セント欲ス幸ニ莞存ノ榮ヲ賜ハラントトヲ冀フト云爾

明治四十四年四月三日 中央大学学員会総代 中山佐市

夫れより柏原秘書官は左記司法大臣子爵岡部長職閣下の祝辞を代読し

茲ニ中央大学創立第二十五年ノ記念式ヲ挙ケラル惟フニ本学  
既ニ四千有余人ノ卒業生ヲ出シ各職ニ朝野ニ在リ真ニ盛ナリ  
ト謂ツ可シ而今以後更ニ益拡大シ其所期ヲ貫徹セラル可キハ  
推テ知ル所ナリ式ニ臨ミ一言以テ之ヲ祝ス

明治四十四年四月三日

司法大臣 子爵 岡部長職

又日本興業銀行總裁法学博士添田寿一氏より左の演説あり

学長並に諸君、一体此祝辞などと云ふものは千篇一律のもの  
でありまして、余り敬服したものではありません、殊に長き  
を避けなければならぬことでもあります故に演説などと云ふこ  
とは少しく名と実と添はないのであります、唯簡単に此目出  
度い日に臨みまして祝意の万一を表するに過ぎないのであり  
ます

私が此学校に就て敬服致して居る点が茲に五つある、第一は  
既に学長が述べられました如く此英吉利法と云ふものを土台  
とせられて居ると云ふことにある、英吉利法は私は法律家で  
ございませぬから、学長の言葉に依つて考を定むるの外はな  
いのであります但角礫に聞く所に依りまして甚だ適切  
である、実際的である、所謂常識に譬へられる所の精神を備  
へたものである、法律の空文よりは事実が先に立ち其事実を  
援助して往く所の精神を有つて居るものであると云ふことだ  
けは承つて居ります、是れ実に我国の必要に応じたる法律学  
であります、又既に過去の必要に止まるが如く学長は仰せら  
れましたけれども私は益今日此英吉利法に固有なる学風を発  
揮せられんことを希望して已まぬのであります、何故なれば

我国の今日の実際は果して如何、法律雨の如く降り法律が総  
て社会を支配せんとしつつある、然るにそれでは決して完全  
に目的を達することが出来ない、事実が主でなくてはならぬ、  
法律はそれに従つて所謂制裁強制を加へて往くべきものでな  
ければならぬ、是れは間違つて居るか知らぬが私の窃に信ず  
る所であります、然るに法律の実際は果して私の希望通りで  
あるや否と云ふことは申すまでもなく諸君が御感じになつて  
居らしやるだらうと思ふ、此法律万能、法律多きに過ぎる、  
法律が事実を曲げんとすると云ふ弊に陥つて居る場合に於て  
は益英吉利法の固有なる精神を發揮せられて此弊風を矯正せ  
られんことの必要は愈加はつて来たると云ふことを私は述ぶる  
に憚らぬのであります(拍手) 第二は一体法律と云ふもの  
と経済と云ふものは余り仲が善くないのであります、じやと  
申しても私は奥田博士とは同年に卒業した者でありまして奥  
田博士は法律に向はれ私は経済に向つたのであります但決し  
て始終喧嘩をして居ると云ふ訳ではございませぬ(笑声) が  
どうも法律家は英吉利法を修める御方と雖も動もすれば少し  
く経済家から見ますと不満足に思ふ点がある、又法律家から  
御覧になりますと経済家と云ふものは甚だ俗物である、甚だ  
彼等は卑近なことばかり云ふて居ると云ふやうなる御非難が  
あるだらうと思ひます、それは自らも甘んじて受けますが、  
茲で法律と経済とは相伴つて相補ひ、相待つて全きを得るも  
のであると云ふことを私は申上げたいのであります、物何者  
か己れ独りを以て完備して居らんやです、人間と雖も同様で

ある、学問と雖も亦然り、即ち法律は法律に固有なる所の欠点がある経済は経済に就て又同様の不備なる所なきにしもあらず（笑声）即ち法律家は厚生と云ふやうなる所を藁地に目掛けて進まるる、経済は実用と云ふ所を以て主眼と致して居ります、為にどうしても其一つをやつて事の完全を期すると云ふ訳には参らぬ即ち法律の厚生に基いて経済学者は幾らか其誤りを補ひ、又法律家も経済家の思想を幾らか酌まれて其陥り易き弊を少なくせらるるならば茲に於て完全なる学者が出来、又法律学も幾らか實際的になり経済学も幾らか厚生に適ふと云ふやうになつて参りました其研究する人も学問も完備すると云ふことを申上げて宜からうと思ひます、此点私が私は此学校に於ては結付けられて居ると云ふことを発見致しまして大に慶賀に堪へないのであります、即ち一方には法律学科、一方には経済科、商科と云ふものを置かれて居ると云ふことは是れは成程級は各異なるか知りませぬが、一校内に此経済、法律の学は同時に攻究せられると云ふことは自ら此二つの学をして互に完備に近からしむる上に効果を奏するであらうと云ふことを考へまして是れ亦大に慶賀に堪へない所であります、第三は先刻元田君の御言葉の中より発見致しましたのであります、斯く多数の諸君が実務に就かれて居ると云ふことであります、今日我国に於ける一体学問の目的は私は大に分らないので、何の為に学問をして居るのか、斯く多数の学生諸君が年年帝都に集り、無数の学生が学校を卒業せられるのであるが、何の為に左様なることをせ

られるのである、何時迄も人間が無職で経過して居ると云ふことは是れは実に怪しからぬ話である、のみならず甚損な話である（笑声）是れは経済家として余りにどうも、それだから経済学者はいかぬと仰せられるか知りませぬけれども、兎に角徒な話であります、成程学問の研究は深からざるを得ぬ、それは職業に就て居つても出来ることである、又しなければならぬことである、職業に就けば学問のことを総て忘れて仕舞ふと云ふことは是れは即ち完全なる教育を受けた者の採らざる所である、如何なる職業に従事すると雖も己が得たる所の此学校教育の恩恵を己の生命の中は伝へべきである、だからして職業に就くと云ふことと益学理を攻究すると云ふことは両立するのである、果して然らは何ぞ速に職に就かざる、我国の如く遊民、無職業者の多ひ国は私は恐らくは開明国に於てはあるまいと思ふ、此無職業者、此遊民の多数を以て国家を盛に経営するなんと云ふことは到底出来ない問題である、何でも職業を早く求め早く従事し之に一度身を投じたならば誠心誠意恰も封建時代に武士が其職に斃れたる所の精神を以て職業に忠実ならざれば我国の事業進まず我国の政治も腐敗して総てのことが不完全に終ると云ふことは私は断言して憚らぬのであります、然るに先刻より伺ひますれば多数の職業に従事せられて居る統計数を挙げられまして私は実に此学校の為め又我国一般の為に慶賀に堪へないのでありますから之を第三の賀すべき点として掲げたのであります、第四は是れ又既に諸君の御聴きに入つたのであります、学



校と学生と云ふものの関係は今日果して如何、学校も商売主義ならば生徒も商売主義である、学生が商売主義と云ふことは如何ありませうけれども、即ち学校は唯教育を受ける所である、卒業して仕舞へば其学校を思ふの念は動もすればなくなつて仕舞ふ、学校も唯学生の多き授業料の収入の多きを目的とするに止まる、学校も所謂商売主義ならば学生も商売主義と申すは之が為めであります、是れは経済学者としては甚だ喜ぶべきやうに御考になるか知れませぬが、経済学と云ふものは左程浅薄なものではない(笑声)、左程冷酷なものではない、経済の主眼は利用即ち「ユテリチー」にある、左様な唯商売一遍の教育と云ふものは完全に目的を達しない以上所謂利用の原則には依りませぬ、故に経済学者としても左様などうも浅薄冷酷なる教育の仕方は余り敬服し兼ねるのであります、のみならず左様な教育の仕方では完全なる人物養成と云ふことは六ヶ敷いのであります即ち学校も学生の為めを思ひ又学生も其母校の恩義に感ずると云ふに至つて始めて学校と学生との間に一種言ふべからざる尊むべき又尊重すべき結果を生ずるのであります、即ち此点に於て今日私は此広大なる校舎其他又奥田博士に向つて図書館迄も寄附せられると云ふことは実に私などの考には殆ど感激に堪へないのであります、斯くありてこそ初めて学校と学生との関係が理想的に近いのである、斯くありてこそ今日に我国に行はれて居る所の商売的教育の弊風を打破するに足ると思ふのである(拍手)、是れは諸君が私は天下に向つて誇るに足る所の美風

であると思ふのである、それで此点に就きまして他にも或はあるかも知れませぬが、先刻も御聴きの通り余り屢聞きませぬ、又斯の如き広大なる校舎又図書館迄も設けられると云ふが如き美挙は私も未だ寡聞にして聞きませぬ故に是れは此学校に就て私が敬服致しました点として掲げざるを得ぬ次第であります、それから次に私が敬服致しましたのは即ち師弟の関係を諸君が私の考、私の希望する、私の理想とする所に近き所迄持つて往かれてあると云ふことを敬服したのであります、即ち此学校の初めより尽力せられたる所の奥田博士の為に図書館迄も設けられると云ふに至りましては是れ中世間に稀に見るの美挙であります、それで此点に就きまして尚ほ学校と学生との関係が今誤つて居ると云ふことを諸君が大に矯正せられたと同様に又此点に於ても諸君の今日の美挙は大に世の弊風を戒しむるに足ると敬服に堪へない次第である、而して茲に於て少しく私は友人即ち奥田博士と私とは甚だ仲の善いと云ふ証拠の為に申上げて置きますが、今日或事業に向つて博士の如き献身的に終始一貫尽さるる御方は余り沢山ないのであります、是れが即ち我国の総ての事業の進まざる所以である、是れが即ち我国に於て諸君が記憶せられてまだ新らしき所の大会社などの破綻の生ずる所以であります、是れが私より言はせれば此所には大分立法院に従事せられる御方もありますが、行政整理の実際を行はざる所以であります、皆人間が己の職業を完全に尽していないのであります、斯う云ふては例外がありまして今日御出席の御方は然ら

ずと申上げるのでありますが(笑声)世間には此職務に忠実、職務が我生命であると云ふ迄に職務に熱心して居る者は此堂に居られる以外の社会に於ては(笑声)容易に望むことが出来ないのであります、此弊はどうしても打破せなければならぬ、是れが我国の他の先進国と並進する能はざる所の一大原因であります、それで私の友人なる奥田君が模範例を示されて諸君に此図書館迄も寄附せしむるに至つたと云ふことは——せしむると云ふては悪ふございますが——寄附を受けられるまでに至つたと云ふことは独り是れは奥田君即ち私の旧友の爲めに實に喜ばしき限りであるのみならず我国の弊風に向つて一の模範を示すに足ると云ふ点を茲に申上げて置かざるを得ぬのであります、それで今日此目出度い式の場合に於きまして余り長く申すと云ふことは却つて諸君の御迷惑でございます故に私は最早此点に止めて置きたいと思ひますが、一つ述べて置きたいのは今や国家も個人も激烈なる競争場裡に立つて居ると云ふことは皆さん御承知の通りで私が嗷嗷の弁を要しませぬのであります、学校も亦然り是れは申上げなくとも諸君の御分りになつて居る所であらうと思ふ、一つの国、一つの人皆此競争場裡に立て終局の勝利を奏せんと欲せばどうしても他に優る所の殊勝を有つて居らなければならぬ、特点を有つて居らなければならぬ、特質を備へなければならぬと云ふことは申すまでもない、果して然らば学校も亦然り、学校も即ち社会の中に成立してある以上は私の申上げた所の原則に外れることは出来ない、若し然りとせば前述べ

たるが如き特色を備へたる所の此中央大学は前途甚だ多望なりと申上げて宜からうと思ふ、又此中央大学をして将来益發展せしめんと欲せば此特質、此殊勝を益發揮せられざるを得ぬと申上げなければならぬ、此他と違つたる所の点を以て諸君が益此学校の爲めに尽さるるならば私は此大学の前途は甚だ多望にして激烈なる競争場裡に必ず最終の勝利を占めらるると云ふことを茲に謹んで申上げ失礼なる言葉を以て祝辞に代へる次第でございます(拍手喝采)

日本勸業銀行総裁山本達雄氏の左の祝辞は齊藤二郎氏之を代読し

我国法制ノ基礎未タ定マラサルノ時ニ方リ夙ニ英吉利法律学校ノ名称ヲ以テ興リ二十余年間学生ヲ教育シテ絶エス有為ノ人材ヲ輩出セシメ又英米ノ良書ヲ翻刻シ著書講義録ヲ出版シテ斯学ノ普及ニ努メタル中央大学ノ功績偉大ナルハ世既ニ定論ノ存スル所ナリ就中中央大学カ其ノ設立ノ初二当リ専ラ英米法ノ長所タル実地応用ノ道ヲ唱ヘ爾来著実穩健ナル学风ヲ我国ノ学界ニ扶植シタルハ吾人ノ最モ多トスル所タラスンハアラス従テ中央大学出身ノ學員諸君カ或ハ法典ノ制定ニ、法規ノ運用ニ或ハ中央ノ政務ニ、地方ノ改良ニ偉功ヲ奏セラレタルハ予ノ言ヲ埃タサル所ナリト雖モ殊ニ本学ノ特色タル常識ヲ貴フノ美風ヲ發揮シ以テ我実業界ヲ裨益セラレタルコト甚タ尠シトセス聞ク中央大学ハ近来時運ノ推移ニ伴ヒ其ノ組織ヲ改メ経済商業等ノ分科モ亦整然トシテ備ルト将来益我実業界ニ適材ヲ出シ一層国家ニ貢献スル所アルヘキハ予ノ信シ

テ疑ハサル所ナリ今ヤ中央大学創立二十五年ノ記念式並ニ記念講堂ノ授与式ヲ舉行セラルルニ際シ聊カ所感ヲ述ヘテ以テ祝辞ニ代フト云爾

明治四十四年四月三日 日本勸業銀行總裁 山本達雄

植村俊平氏は中央大学学員会関西支部を代表して左の祝辞を朗読し

回顧スレハ我中央大学ノ創立ハ明治十八年ニシテ今ヲ去ルコト実ニ二十五年前ニ属ス当時微微タル一私立学校ニ過キサリシモ当局ノ経営機宜ニ適シ漸次校運ノ隆盛ト共ニ学制ヲ改良シ規模ヲ拡張シ業ヲ修ムル者日ニ月ニ其数ヲ増加シ今日有用ノ材ヲ出スコト五千四百ノ多キニ達シ多士済済到ル所ニ重要ノ地位ヲ占ム当局ノ指導訓育其宜シキニ因ルニアラスンハ奚ソ能ク斯ノ如キ盛運ヲ来スヲ得ンヤ

曩ニ創立二十年記念会ヲ舉行セラルルヤ記念講堂ノ新ニ建設セラルルアリ今又創立二十五年記念会ヲ舉行セラルルニ際シテ講堂増築並ニ奥田文庫設立ノ挙アリ我大学ノ面目ハ歳ト共ニ一新セラレ校運益々發展シ本日茲ニ春風駘蕩ノ時ヲ期シテ創立二十五年記念会ヲ舉行セラルル余亦学員ノ籍ニアルノ故ヲ以テ此盛典ニ参列スルノ光荣ヲ辱ウス欣喜何ソ堪ヘン爰ニ中央大学学員会関西支部ヲ代表シテ謹ンテ祝意ヲ表ス

明治四十四年四月三日

中央大学学員会関西支部総代 植村俊平

宇都宮高三郎氏は中央大学学員会朝鮮支部を代表して左の祝辞を朗読し

維時明治四十四年四月三日皇祖祭ノ佳節ヲトシ我中央大学創立第二十五周年記念ノ盛典ヲ舉行セラルル顧ミレハ我力校ノ創設ハ遠ク憲章<sup>マニフェスト</sup>發布ノ前ニ在リ爾來其準備及実行時代ヲ通シテ貢獻スル所多大ナリシハ茲ニ喋喋ノ贅言ヲ須ヒス

吾人曾テ我校ニ在リ多年懇篤ナル講師諸先生ノ訓育ヲ受ケテ人トナリ驚オヲ以テシテ猶能ク今日アルヲ得タルハ全ク我校ノ賜トシテ常ニ深ク其厚恩ニ感謝スル所ナリ今ヤ我学員ノ朝鮮ニ在ル者行政部ニ、司法部ニ若クハ言論界及実業界ニ涉テ各其適応ノ活動ヲ為シツツアリ想フニ朝鮮ノ併合ハ曠古未曾有ノ盛事ニシテ実ニ我二千年來ノ国是ヲ遂行シタルモノト云フ可ク而シテ我学員ノ彼地ニ在ルモノ直接ニ間接ニ之ニ与テ力アリシハ吾人ノ本日我校ノ記念祝典ニ際会シテ之ヲ諸君ノ前ニ誇ルノ光荣ヲ有スルハ衷心窃カニ喜悦ノ情ニ堪ハサルト同時ニ我校恩ニ感謝スルノ念更ラニ深厚ナラスンハアラス茲ニ我校創立二十五年周年記念ノ盛典ヲ舉行スルニ際シ我朝鮮学員会支部ハ殊ニ吾人ヲ派シテ満腔ノ喜ヲ諸君ノ前ニ述ヘシム我学員ハ常ニ遠隔ノ地ニ在テ母校ト疎隔スト雖モ其母校ヲ思フノ情切ナルニ至リテハ決シテ人後ニ落チス吾人ハ我朝鮮学員ノ代表者トシテ之ヲ諸君ニ報告スルト共ニ我校運ノ将来益隆盛ナランコトヲ祈ルモノナリ茲ニ本日ノ盛典ニ臨ミ感懐止ム能ハサルモノアリ敢テ蕪辭ヲ陳ヘテ祝意ヲ表スト云爾

明治四十四年四月三日

中央大学朝鮮学員会支部総代 京城通信社長 宇都宮高三郎

中川銑三郎氏は中央大学大阪支部実業会を代表して左の祝辞を

朗読し

維時明治四十四年四月三日我中央大学ハ創立二十五年ノ盛典ヲ挙行セラル欣快何ソ耐ヘン

夫レ二十五年ノ星霜ハ人生ノ半ニ当リ短カシト云フヘカラス今ヨリ既往ノ事跡ヲ顧ミレハ感軫タ深シ意フニ本学ハ明治十八年ノ創立ニ係リ同二十五年ニ至ルヤ不幸ニシテ祝融ノ災ニ遭ヒ嘗テ数万金ヲ投シテ新築シタル校舍ハ十万卷ノ図書ヲ蔵スル文庫ト共ニ悉ク烏有ニ帰シ去レリ然レトモ此年直ニ校舎ヲ再築シ當時在学セル千有余名ノ学生ニハ其不便ヲ感セシメサルコトヲ得又本学ハ此年ニ於テ盛ニ法典延期ノ議ヲ唱ヘ奮戦苦闘遂ニ其目的ヲ達スルコトヲ得タリ自是以往校運益々隆昌ニ趨キ英才ノ来リ遊フモノ漸ク多キヲ加ヘ三十八年ニハ校舍ノ狹隘ヲ告クルニ至リシヲ以テ創立二十年記念講堂ヲ増築シ今又創立二十五年ニ際シ記念講堂ト奥田文庫トヲ増設スルニ至ル翻テ本学出身ノ士ヲ觀ルニ其数既ニ五千ニ上リ其中ノ最大多数ハ社会各種ノ方面ニ活躍シテ枢要ノ地位ヲ占メ国家發展ノ機運ニ貢獻セリ而シテ前後二回ノ記念建築カ単ニ出身者ノ寄附金ノミニ成ルモノニシテ毫モ他力ニ負フ所ナカリシ如キハ本学ノ基礎カ如何ニ鞏固ニシテ母校ト出身者間及出身者相互間ノ交誼友情カ如何ニ親睦ナルカヲ示シテ余アリト謂フヘシ是レ洵ニ本学今日ノ盛運ヲ見ルニ至リタル所以ナリ余ハ尚ホ茲ニ法学博士奥田義人君ノ勤勞ヲ頌セント欲ス博士ハ本学創立以來教授並ニ經營ノ任ニ當リ拮据鞅掌二十五年汲汲トシテ本学ノ為メニ尽瘁セラル其功績挙ケテ数フヘカラサ

ルモノアリ是レ今回我學員諸氏カ奮テ奥田文庫ヲ設ケ其功勞ヲ記念セントシタル所以ナリ

余ハ此機会ニ於テ切ニ本学現在ノ隆盛ヲ祝スルト共ニ其将来ノ發展ト奥田博士ノ健康トヲ祈ラサルヲ得ス茲ニ一言ヲ陳ヘテ祝辭ト為スト云爾

明治四十四年四月三日

中央大学學員会大阪支部 実業会總代 中川銃三郎

尚ほ鳥居錡次郎氏は左の祝辭を朗読し

時維レ柳緑花紅春光天地ニ滿ツ本日ノ斯式人天共ニ祝福ス

開校以來二十有五年時勢ノ進運ニ乗託シテ校基愈々定マリ校

風益々揚カル二十五年ノ歲月必シモ長カラスト雖モ其ノ我国

法政ノ改善ニ貢獻スル蓋シ大ナリ

如今我国ノ法政漸ク正サニ改マリテ而シテ其人未タ新タナラ

ス日ニ其弊ヲ聞ク矣我校ノ前途抑モ亦遼遠ナラストセス

茲ニ記念講堂新築工竣ルヲ告ク仏ハ既ニ刻マレタリ開眼ハ未

タシ竜ハ正ニ画カレタリ須ク晴ヲ点セヨ輪奐已ニ新装ヲ著ク

校運豈ニ一段ノ活躍ナカルヘケンヤ我校ノ当局希クハ幸ニ自

重尽誠セヨ

本日此式ニ列スルノ光荣ヲ得テ二十五年前ノ當時ヲ回顧シ今

昔ノ感軫禁スル能ハス乃チ一言ヲ攄ヘテ祝辭ニ代フ

明治四十四年四月三日

鳥居錡次郎

又松保善助氏は法律科学生を代表して左の祝辭を朗読し

百花妍ヲ競フノ好時節ヲ以テ我中央大学ハ創立第二十五年記

念ノ祝典ヲ挙行セラル

惟フニ我大学ハ学長其他諸先輩カ堅実ナル方針ヲ以テ二十五年間一日ノ如ク刻苦經營セラレタル結果漸次発達進歩シテ今ヤ声名斯界ニ隆隆タルニ至レリ生等幸ニ法学生トシテ本大学ニアリ諸先生ノ指教ヲ辱ウシ今日此盛大ナル式典ニ列スルノ光荣ヲ得タルハ其快実ニ言フヘカラサルモノアリ聞ク列席學員諸士ハ我法科ノ出身最モ多シト是レ生等法科学生ノ窃ニ誇リトスル所ナリ然レトモ吾人ハ之ト同時ニ其責務ノ甚タ輕カラサルコトヲ覺ヘスンハアラス古ノ人ハ言ヘリ「精神一到何事カ成ラザラン」ト生等自今益奮勵当初ノ目的ヲ貫徹スルニ努メ学成ルノ日ハ諸先輩ノ後ニ從ヒテ社会ニ力戰奮闘シ母校及諸先輩ノ盛名ヲ汚カサザランコトヲ期ス茲ニ聊カ所感ヲ述ヘテ以テ祝辭ト為ス

明治四十四年四月三日 法律科学生総代 松保善助

清水哲二郎氏は經濟科学生を代表して左の祝辭を朗読し

維時明治四十四年四月三日我中央大学創立第二十五年記念式ヲ挙行セラレ内外貴紳ノ蒞臨ヲ辱ウス誠ニ生等ノ光荣トスル所ナリ

惟ルニ本学ハ当初法学専攻ノ学校トシテ創立シ爾來二十有五年ノ星霜ヲ積ミ学運日ニ月ニ隆盛ニ赴キ時勢ニ鑑ミ經濟科並商科ノ制度ヲ設ケ今ヤ学業ヲ了レ社会ニ貢獻スル者五千名生等其後ヲ次キ学長閣下ノ嚴肅ナル監督ト教職各位ノ懇篤ナル指導トニ依リ千挫屈セス百折撓マス孜孜トシテ学ヲ勉メ各其志ヲ成サムコトヲ期シ又本学ノ益々盛運ニ向ハムコトヲ望ミテ巴マス生等幸ニ此盛典ニ列シ欣喜実ニ措クコト能ハサルモ

ノアリ茲ニ聊カ蕪辭ヲ陳シテ以テ祝辭トナス  
明治四十四年四月三日

中央大学經濟科学生総代 清水哲二郎  
梶尾円平氏は商科学生を代表して左の祝辭を朗読し

明治四十四年四月三日我中央大学創立第二十五年記念ノ祝典ヲ挙行セラレ内外貴紳ノ蒞臨ヲ辱ウス生等教ヲ本学ニ受クルノ故ヲ以テ亦其盛儀ニ列スルノ光荣ヲ荷フ欣喜何ソ加ヘン願フニ本学ハ夙ニ質実穩健ノ学風ヲ以テ満都ノ学界ヲ風靡シ其間国家有用ノ材ヲ出シタルコト前後五千有余名是ヲ以テ学運ノ隆盛タル普ク社会ノ認ムル所トナル盛ンナリト謂ツヘシ而シテ今ヤ新ニ校舍ヲ増築修繕シ益々斯学ノ為メニ尽瘁セラレントス生等本学学生タルモノ豈ニ奮勵セスシテ可ナラン哉生等今正ニ学窓ニアリ未タ国家ノ大計ニ容喙スルモノニアラス然レトモ居常徐口ニ世界ノ大勢ヲ觀ルニ欧米列強カ各々富強ナランコトヲ欲シテ其心血ヲ灑キ孜孜汲汲トシテ尚且ツ及ハザランコトヲ恐ルルモノハ実ニ商業上ニ於ケル經濟問題ナリトス生等幸ニ本学商科ニ在リ刻苦瘁勵以テ将来立脚ノ地ヲ成サンコトヲ期ス他日業成リテ素志ヲ達スルコトヲ得ンカ独リ生等ノ幸福ナルノミナラス又本大学ノ先進ニ酬ユル所以ニアラサルナキヲ得ンヤ生等本日ノ盛典ヲ祝スルニ当リ敢テ素懷ノ一端ヲ述ヘテ祝辭ト為ス

明治四十四年四月三日 中央大学商科学生総代 梶尾円平

飯豊武雄氏は英語専修科学生を代表して左の祝辭を朗読せり

I deem it my great honour to give a few congratulatory words.

on this auspicious occasion of the 25th anniversary of our college. I undertake this heavy but honourable task as the representative of the evening class of English.

Since the enlargement of the school building was set on foot one year has elapsed, and now it came to completion. All this is no doubt due to the deliberate plan and effort of the directors of this institution. We are profoundly thankful for the attendance of so many gentlemen on this most auspicious occasion. We confidently believe that the authorities' exertions will lead to the development and the success of our college.

次て太田資時氏は鏡原隼人、左右田信二郎、磯貝大二郎、大岩勇夫、高橋捨六、下森久吉、伊藤秀雄、中橋徳五郎、高野兵太郎、小町谷純、村田不二三、三島駒治、佐野春五、森肇、紀志嘉実、田畑源五、横田維好、上内恒三郎、川田謙二、馬場愿治、西川鉄次郎、藤田隆三郎及長崎在住學員一同、大阪控訴院同地方裁判所並同区裁判所勤學員一同、広島學員会支部、九州學員会支部、函館學員会支部、東北學員会支部、名古屋學員会支部、台湾學員会支部、釜山學員会支部、秋田學員会支部、山形學員会支部、埼玉學員会支部其他より来りたる祝電を朗読し夫れより中央大学理事法学博士奥田義人氏は徐ろに身を演壇に移し謹て左の謝辞を述べられたり

私は本学を代表して来賓並に學員諸君に一言の謝辞を述べます、本日は来賓諸君が御多忙なるにも拘はらず御臨席下さつ

たのは本学の最も光栄とする所であります、茲に謹んで御礼を申し上げます、又學員諸君には本学の創立二十年の記念に當つては巨額の金員を醸集し彼所に存在致して居る所の記念講堂を建築して之を本学に寄附せられ今又創立第二十五年の記念に當つて更に前回に倍する所の金員を醸集して従来の講堂に繪二階を増築し本日をして之を本学に寄附せられました、諸君が母校を思はるるの厚き真に感謝に堪へぬ次第であります、是迄欧米諸国は勿論我国に於きましても諸君が御承知の通り富豪等より或は建設物、或は金員を教育機関に寄附して育英の事業に同情を寄せたと云ふことは其例決して少くないのであります、然れども学校の出身者が母校を思ふて毫末も他の力を籍(藉)りず前後二回まで此広大なる建築物を寄附されたと云ふが如きは我国に在りては勿論欧米諸国に在りても恐らくは類例の少ないことであつて真に龜鑑とするに足るべき美挙たることを疑はぬのであります、而のみならず母校と出身者との情誼に就きまして実に好模範を示すものであると申して決して過言でないと思はれます、私は諸君の御厚情に對して満腔の熱誠を以て茲に感謝を表します、而して又本日此記念式を行ふに就きましては各地の學員会支部よりそれぞれ代表者が上京せられ母校に對して同情を表されましたのも私は実に諸君が母校に對して情誼の厚きに感涙を催す次第であります

尚ほ終りに臨みまして本学の代表者の資格を離れて學員諸君に謝意を表しなければならぬ二つの事柄があります、其一つ

は即ち吾吾理事者に本日をして記念品を贈与せられたと云ふことであり、吾吾は學員諸君の御委託に依りまして不肖を顧みず理事者の任に當つて居るとは申すものの何事も不行届でありまして諸君に対して常に申訳のないことと考へて居る次第でありますのに本日は諸君より特に吾吾に記念品を贈与せられたと云ふことは誠に慚愧に堪へぬ次第であります、

然れども折角諸君の御厚意により茲に出ました以上之を辞するのも却つて失礼と存じますに依つて謹んで御請けを致し理事者一同に代つて茲に厚く御礼を申し上げます、又他の一つのこととは私一個に關することであり、先刻花井博士よりの御報告に依りますと私が本学の創立以来二十五年の間断絶なく本学の事業に關係を致した記念として學員諸君に於て私の為に特に文庫を御設立さるる御計畫の趣であります、如何にも私は創立以来二十五年の間断絶なく本学の事業に關係は致して居りますには相違ないのでありますけれども、諸君の御承知の通り浅学不才なる私のことであり、殊に終始多忙の身であります故に本学の為に何等貢獻を致したと云ふこととはないのであります、然るにも拘らず因らずも諸君が私の為に斯る御計畫を下さると云ふことは私に取りましては實に無上の光栄を感じると同時に一面に於きましては汗顔の至に存するのであります、茲に御報告に対しまして諸君の御厚意を謝し併せて今後微力の及ぶ限り諸君の御厚意に背かざらんことを期する次第であります

是れにて本日の式を終ります (拍手喝采)

式後別席に於て模擬店を開き又余興として細川風谷の義士談、筑風の琵琶等あり孰れも喝采声裡に演了し五時に及んで新築大講堂に於て盛大なる立食の饗応あり主客歡を罄しくして散会したり当日は生憎雨天なりしにも拘はらず来会者多くして数百名に達し來賓の主なる者は左の如し因に当日来会の諸氏へは法學新報記念号及び記念繪葉書を頒ちたり

- |        |        |       |       |
|--------|--------|-------|-------|
| 今村恭太郎  | 伊藤 幹一  | 伊藤 欣二 | 磯野 衡  |
| 岩崎 勲   | 石山 彌平  | 岩崎鉄次郎 | 井上 敬吉 |
| 石原毛登馬  | 稲木 重俊  | 伊藤久次郎 | 伊藤 高義 |
| 伊藤金次郎  | 伊沢 芳造  | 伊藤 芳郎 | 伊能 宗吉 |
| 犬養駒太郎  | 乾 喜代八  | 岩本 磐門 | 井上 孝  |
| 入江 忍久  | 稲田周之助  | 石沢久五郎 | 岩崎勝三郎 |
| 伊東 祐治  | 石川 文吾  | 岩田 一郎 | 服部金太郎 |
| 馬場 金助  | 馬場豊三郎  | 林 間   | 羽柴金次郎 |
| 葉山万次郎  | 花井 卓藏  | 原田 鉦  | 萩原 新  |
| 針谷定之助  | 伴 善光   | 春山 泰治 | 原 重太郎 |
| 長谷川佐平太 | 仁井田誠次郎 | 西村勸之助 | 西川 一男 |
| 堀 道彦   | 堀 栄一   | 保坂栄之丞 | 本間 信藏 |
| 星野 徳一  | 星野 照   | 堀江専一郎 | 細谷 明  |
| 穂積 陳重  | 本城 三郎  | 豊田久和保 | 外山 辰藏 |
| 鳥貝 好勢  | 所 銀作   | 戸田 国雄 | 富田祐太郎 |
| 徳田 直吉  | 鳥居諦次郎  | 戸倉惣太郎 | 大倉 鈕藏 |
| 大藤敏太郎  | 大岩金次郎  | 大松 直重 | 大沢 長橘 |
| 大内 秀人  | 大河原卯八  | 岡内 判藏 | 岡田 実磨 |

岡崎 善太	小川万二郎	太田 資時	大島 三橘	中島真太郎	中山恒三郎	中山武三郎	中村 惣平
大場 茂馬	太田 団野	大塚勝二郎	大塚玉次郎	中村 勝一	中村由次郎	中山 佐市	永村 源作
尾崎 利中	小栗盛太郎	小野瀬不二人	小倉 敬止	中村 甚慶	中川銃三郎	中村 吞牛	中村 満
大竹 虎雄	奥田 義人	尾崎 周蔵	大沢豊次郎	難波弁太郎	村山 一平	村上 太七	村上民三郎
岡野敬次郎	奥田 剛郎	岡村 輝彦	小山 残平	室谷 修	上原 鹿造	内田 嘉吉	内村達次郎
和田 杠治	渡辺福三郎	渡部 繁雄	渡辺常太郎	添間 真学	梅里 大兄	卜部喜太郎	上田 成章
渡辺 豊治	渡辺 澄也	渡部 金城	脇田 勇	宇都宮高三郎	野村 美策	野村 嘉六	黒田 英雄
和田 瑞	鷺見亀五郎	神田 鐳蔵	川上 清	国枝 鎌三	雲田平太郎	久保 義郎	窪田欽太郎
片山 寛	加藤新太郎	茅原廉太郎	金沢 卯一	工藤 武重	胡桃 正見	倉永 恕	山川義太郎
川久保源治	河野 秀男	河島 台蔵	菅 直太郎	山田清一郎	柳沢慎之助	柳沢 奈太	山田 知晃
加瀬 禧逸	川瀬栄太郎	川手 忠義	笠原文太郎	柳川 勝二	山本 一蔵	山上 謙吉	町井鉄之介
川島 仟司	柏原与次郎	掛下重次郎	加藤 正治	松井 道隆	正岡 経利	松平 信恭	榎田 安治
神原国太郎	亀田外次郎	河瀬 正雄	吉益 俊次	榎 安市	松本 潤治	間野義三郎	前田定之介
横山 慶朝	吉村長次郎	吉川 等	横田 民造	松井政一郎	前田久次郎	松岡 高明	松波 孚強
吉田 孝	田浦 茂松	田中唯一郎	棚橋 一郎	丸山 熊八	松永和一郎	榎谷 益蔵	松沢 玗三
高橋 一知	高橋 一雄	高橋 浅治	高島 愿	松浦 和平	松田 源治	松尾参三郎	福島 太明
高橋 為雄	高柳覚太郎	高勢 友吉	田村松之介	福岡 博	古谷 伊平	古屋 八郎	藤井 竹蔵
谷 忠行	武末祐三郎	竹内 義一	竹内 铸作	藤平久太郎	古谷 伊平	古田 良三	福井 牛丸
高津敏三郎	武田 明	高崎 介蔵	田中 文蔵	藤本徳之進	福井 三郎	藤田幸太郎	福田 恕人
高田喜之助	高窪喜八郎	高木 善行	高野 金重	古本 崇	児玉淳一郎	小松謙次郎	近藤恵次郎
高根 義人	田上 省三	高崎長一郎	滝村 斐男	腰山 長吉	小島金太郎	小阪宇太郎	小林 武彦
田中 隆三	館野卯三郎	田村 隆平	添田 寿一	小松 林蔵	小菅 寅吉	小島誠之進	五味平五郎
添田 増男	外岡 久	土屋 雄吾	常川光次郎	小島重太郎	江草 重忠	遠藤武次郎	江原 素六
内藤 章	成瀬 正雄	成田 正雄	中山寛六郎	寺島 静	手代木佑寿	出口 元久	寺岡 佐市



手塚彦太郎	東 亀五郎	天野 敬一	青木 昌吉
蘆沢 昭三	安東 敏之	安藤 亮	安藤 剛毅
姉齒 松平	青島 照瑞	新井要太郎	相原文四郎
有竹 雅己	東兵右衛門	朝比奈孝一	阿部 克己
天野 徳也	浅野正太郎	西郷 斉員	齊藤 孝治
齊藤 隆夫	佐久間信恭	柵瀬軍之佐	柵原 忠一
齊藤 染治	齊藤 正毅	佐藤 修	齊藤 二郎
佐原寅三郎	坂崎 雋	沢田 武一	佐藤 正之
北川 銓総	岸本 辰雄	木村 迪	木下 績
岸 清一	木内伝之助	木村 兼孝	菊池 武夫
湯浅 甫	湯沢真太郎	光永 星郎	三輪 一夫
水野 路加	水本 豹吉	三輪 吉次	溝部佐一郎
三宅 碩夫	三浦大五郎	宮部 準次	三輪 智
宮岡恒次郎	溝上与三郎	宮崎 三郎	志田 貞三
塩谷恒太郎	白井 俊一	志賀 三行	下山英五郎
白尾 清次	白川 朋吉	島野 金吾	柴崎 守雄
清水 有国	品川 英一	白井 清行	洪川柳次郎
所沢貞太郎	白井 茂	清水泰次郎	疋田 退蔵
平石 彙夫	平井長次郎	平島 喜智	東 讓三郎
平井彦三郎	森永秀次郎	森本邦治郎	元田 肇
望月 良彦	瀬下 清通	清古 平吉	末弘 巖石
菅谷 正樹	鈴木 長利	杉山彌太郎	鈴木 濟美
須原 大助	杉田卷太郎	杉村広太郎	杉本善次郎